

研究者と実践者を結んだ協同労働研究 Season II

昨年度、「協同労働の多面的な価値と可能性を考える～研究者と実践者の協同研究がはじまる～」を研究テーマに、研究者側から協同労働研究を語ってもらい、実践者のコメントを通して協同研究の可能性を探ってきた。それにより、研究者と実践者の距離が縮まり、個別のつながりが生まれたが、研究者が協同労働の実践に直接触れる機会の不足が課題として残った。

そこで、今年度はSeason IIとして、実践者自身が現場の研究をすることや、実践現場に入った研究者の報告から現場研究を深めていく。

まず、Season IIの第一段となった研究会を紹介する。ここでは、2つの事例が報告された。一つは、東京都にある「みなと子育て応援プラザPokke」の会議場面への参加・観察を通じた報告である。一人ひとりの意見が反映されていく過程と仕組みについて筆者が報告した。補足として、Pokkeの副施設長である小林明日香さんが説明を加えた。

もう一つは、当時慶応義塾大学大学院生であった小川研介さんの修士論文を基に、調査対象となった「富山北部事業所」の野口淳さんとAさん、北陸信越事業本部の川原隆哲さんと、現在中小企業診断士として働いている小川さんの4人に登壇いただき、協同研究の狙いや調査の過程などを振り返ってもらった。ここでは、研究的視点が入ることについて、実践者側からの意味づけが行われた。

こうした協同労働の現場研究について、大阪大学の遠藤知子先生と鳥取大学の木原奈穂子先生よりコメントをいただいた。また、資料として、筆者がPokkeの団会議に初めて参加した際のフィールドレポートも掲載する。

次に、岡山県にある「みずたま事業所」について、協同総研の利根川専務が取材を通じて報告をまとめた。医療生協の清掃業務を行う事業所であるが、盛んに地域活動が行われている。その一つとしてバングラデシュの研究者であるカリム・ジアウルさんと共にパイアの栽培を行うなどしている。その理由を、事業所や地域の歴史を踏まえながら、所長の奥田浩貴さん、副所長の三木保秀さん、現場責任者の入江等さんのお話から明らかにしていく。

現場の実践は、日々の苦労や努力などを元にした試行錯誤の上に成り立っている。こうした当たり前の日々を可視化・言語化し、実践を進める力になる現場研究を進めていきたい。

岩城 由紀子(協同総合研究所 事務局次長)